

アジア時評

1974年 12月号

話の広場

理論こそが近代日本のアジア外交原理として正統的なものになったのである。

「理」の原理で測った場合、東南アジアは日本人の自らみた場合、もともと「理」に乏しい地域であった。「理」に乏しい状況はそこへの対応手段をほとんど正当化するというのが日本人の通念であるからには、東南アジアとの関わりには、アフリオリに放縱な恣意性がまともなつることになった。脱理論の最大の欠点は、アジア外交を規制するモトスの源泉をどこにも所在せしめないところにあるわけだが、その最大の被害者が東南アジアであった。

その結果、日本人の東南アジア観には、二つの顕著な特徴群がみられたようである。くだいていえば、その一つは、いわば「冒險ダン吉」・シンドロームである。つまり、熱帯の密林に裸の土人と象や虎などの動物群を想像する発想である。冒險ダン吉は、そのよう大環境に住みついたただ一人の白人であり、先づ文明社会から来たことを示す身分象徴として腕時計をはめ続けるのである。もう一つの発想は、「北人南物論」である。一人、すなわち文化や文明のたぐいは熱帯にのみあり、南には天然資源

だけが所在するという考え方である。この発想は、戦時中に日本人に定着し、戦後においてますます強化されているようにみえる。

このような発想は、いうまでもなく同調や対話によりは、征服支配や搾取につながる性質のものである。事実、近年の日本人は、そのような発想の力学に素直に従い、ひじょうに不都合な対応だけを繰り返してきたのである。なお悲劇的なことには、日本人はいまだにその二つの特徴群を露呈しておりながら、それ以外の可能性には目を向けようとはしないのである。

スラドコフスキー氏への小さな反論

中嶋 嵐 雄 (東京外国語大学助教授)

中ソ対立下のソ連における現代中国研究の動向については、われわれとしても、つねに注目してゆかねばならないであろうし、私自身もかつて、『アジア・クォーターリー』(第三卷第三号、一九七一年七月)に「ソ連と東欧諸国における中国研究の現

状と特徴」と題する詳しい紹介論文を書いたことがある。ソ連の研究が現在の中国の内外政策を批判する立場からすすめられていることはいうまでもないが、最近の研究方向がたんなるイデオロギー的批判から実証研究の方向へと徐々に移行しつつあることは大変喜ばしいことである。

ところで、ソ連科学アカデミー極東研究所長としてわが国にも知られた中ソ経済関係の權威エム・イ・スラドコフスキー氏(科学アカデミー準会員)が、『極東の諸問題』誌(第三卷第三号、一九七四年六月)に「第二九回東洋学者会議——現代中国についての討論——」という小論を書いている。それは、七三年七月にパリで開かれた東洋学者会議についての報告であるが、氏はそのなかで、「多数の代表者を選った日本の中国学者ですら現代の問題にかんする報告をほとんどおこなわなかった」として、日本の中国学者の報告は鈴木中正氏と坂野正高氏の二報告のみであり、「しかしこれらの報告も、中国の現在の政治問題一切を避けている」と不満を述べたあと、「ブルジョア国家の学者たちは自国の国家政策から本当に『自由』なのだろうか……これ

ら諸国の中国学者たちには、毛沢東主役の中国にかんする微妙な政治的テーマには触れないよう「権威ある助言」が多分与えられていたのである。……彼らの政府が北京との接触拡大の方法を探索するのに忙しい条件の中でそれを批判することは「不適当」であるからである」と語っている。

たしかに、東洋学者会議に多数参加した日本の学者が現代中国の問題に触れなかったことについての指摘はそのとおりであるが、しかし、そのことが日中関係に影響された国家政策の規制のためであろうという推測は、それこそ、「自由の国家政策から本当に『自由』」ではあり得ないと思われるソ連の学界から見た甚しい見当はずれである。

実は、わが国の学界において東洋学者会議は、むしろ中国の近代や古代中世を中心とする国際学会のように一般には考えられているために、私のような現代中国の研究者にはこの会議についてなんの呼びかけも連絡もないというのがその理由であり、このようなわが国学界の認識や非組織性は責められてよいかもしれないが、その点を氏のように解釈されると、これはまったくの

誤解なのである。

最後に、私自身、一九七〇年夏にモスクワで開かれた第一三回国際歴史学会では現代中国の政治とナショナリズムにかんして自己の見解を表明した経緯もあるので、も

しも時間が許せば、次回の東洋学者会議に

は参加して報告する「自由」と備忘書十分にもっているつもりであることをつけ加えておきたい。

アジア時報

既刊目次

(第五卷) (昭和四十九年)

九月号 盗聴なき継続—ニクソンからフォードへ—関元/タイ
 国の現状と日本：富田竹二郎/内から見た人民中国：ウイリア
 ム・セイウエル/フィリピン南部回族徒の民族自決闘争：吾妻
 太一郎/どこへ向うアメリカのアジア戦略：松井真/アジアの
 新動向 ①食糧問題ぐるアジアの現実 ②民音学連裁判とその
 背景 ③草原の国モンゴルの現状
 十月号 ニクソン辞任と米国の外交政策への影響：チャルマー
 ズ・ジョンソン/オイルマネーと世界景気：渡辺長雄/中国の
 対外貿易と国際価格：明野義夫/ソ連・東欧に見る社会主義共
 産主義：吉田直之/アジアの新動向 ①イラク・パース党政權の
 外交戦略 ②バム鉄道建設とシベリア開発 ③南西アジア諸国
 を巡って

十一月号 中東情勢の新動向：ガブリエル・ヴァールブルク/
 アフリカから見た中国：江橋正彦/日中貿易の現状と将来：木
 村一三/フィリピン村落社会の生活意識：池田長三郎/アジア
 の新動向 ①カシミールの最近の動向 ②転換迫られた韓国の
 対外貿易政策 ③「静かなる革命」—エチオピア—の背景とそ
 の行方 ④マレーシアの経済と農業